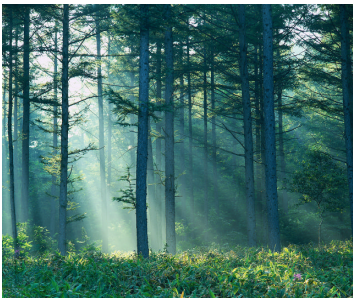


溪流の眠りの中へ



有森信二

電車を降り、泰司は朝刊を買った。地上を歩くつもりのところ、前方が工事中だったので、地下街に降りた。

通路の前に行く多くの背中を掻き分けて小走りに歩き、急勾配の階段を下り、二つ目のコーナ―を曲がったところで、いきなり正面の男とぶつかりそうになった。

「何だよ」と、互いの口から激しい言葉が出た。そう言った途端、二人は同時に目を見開いた。

相手の顔、それは自分の顔そのものだった。髪を左から右に流した恰好、小鼻の丸いところ、両端が下がり気味の唇の端、言葉を発するとき、左上唇を少し上げる癖まで自分とそっくりだった。

「何か付いてるかい」と、泰司は顎を撫でた。同じ仕種で、相手も顎に手を当てる。ネクタイの色、黄系統のブレザー、黒いズボン、使い古したショルダーバッグまで、まるで同じである。目の前に鏡があり、鏡に突き当たったのかも知

しまった。

初めての顔であるのに、どこかで確かに出会ったことがあると思ったり、走り去る電車の窓に映る影を、心の奥の壁のあたりで揺らしているうちに、思わず突き上げてくる感慨に胸震わせたりすることがよくある。

泰司は最初、それは学生時代の一時期に通ったことがある座禅道場での思い出が蘇って来るのかと思った。道場の壁に向かい座っていると、茶一色の壁の中に、青い海や、鮮やかな緑の風景や、砂漠の風景が現れたり、鉤鼻の男や、王宮の衣装を纏った女の姿が現れたりした。

どれもが実際に訪れたこともなく、見たこともない情景であったが、自分が確かにいたのだと実感出来る切実さで、何の脈絡もなしに現れた。だから泰司は、切れ切れの、時間間にすればほんの数秒という間に現れる時々的情景を、正夢とも幻ともつかない、それでいて火花がスパークするほどの鮮やかさで、心の回路に刻み付けて来たのだった。

しかし、今回は違った。座禅のときは頭の隅にこびりついている思いの色であったり、追想の影であったりするのだが、いきなり、自分自身に鉢合わせしたのだった。

二

会社に着いても、泰司は今の出来事が信じられなかった。

れない、と錯覚したほどだ。

相手は左上唇を振り上げ掛けたが、息を吸い、唾を飲み込んだ。「君は誰だ」彼の口はようよう言葉を発し、鋭く睨み付けてきた。泰司も同じ仕種になる。

地下街を行き交う人たちは、双子の兄弟が向き合っている、と眺めて通り過ぎたのだろうか。雑踏の中では、誰と誰が出会っているのかなどと気にする者はいない。誰もが流れて行くし、そこに立ち止まっている者も、流れて行く風景の一コマに過ぎない。

「君こそ誰だ」泰司も口を開いた。答えが返ってくる筈がない、と思つてのことだった。

「井川夏彦という。いつも夏彦と呼ばれる。君は」返ってくる筈のない答えが返ってきた。尋ねた泰司の方が不意を打たれた恰好になったが、「川上泰司、会社員になったばかりだ」と答えざるを得なかった。額にこぼれさせた髪を掻き上げる。

夏彦も髪を掻き上げ、「俺はまだ職は持たない。いや、持つつもりはない。しかし、食うだけは稼いでいる」と言う。言いながらショルダーバッグの中を掻き混ぜていたが、薄い冊子を取り出した。駅のあちこちに置いてある情報誌だ。編集の真似ごとさと首を振り、色の褪せたニコンの一眼レフを取り出した。わかつたかいと夏彦は鼻を蠢かし、お前も会社頑張れよと肩を叩くと、雑踏の中に紛れ込んで

生まれて初めてと言ってもいい。いくら似ているといっても、こうも似ているとなれば、気味が悪い。あいつもびつくりしていたなと独りごちた。

目に付いたのは、どこか懐かしいニコンの旧式のカメラだ。情報誌は、古くから見掛けるものである。

自動販売機で買ってきた熱いブラックコーヒーで喉を潤すと、少しだけ呼吸が楽になった。バッグからパソコンを取り出し、昨晩からの続きにかかる。人事評価システム作りの第一段階の期限が間近に迫っている。

会社のマル秘情報であるので、社外に持ち出すことは禁止されているが、なにしろ期日に追われている。

昨夜も二時過ぎまで基本設計の流れ図を入力し、大方の項目を入れ込んだつもりで出社した。が、やはり自宅に持ち帰った仕事は緊張に欠けるのか、根本的な問題のたて方にミスがあるのを発見し、結局昨夜の作業を中間部分から修正することにした。

人事担当の五人による人事評価システム作成プロジェクトが出来たのは、一週間前だ。それぞれの担当分を持ち寄り、匿名の具体的なデータを入力し、このステップを検証する作業の開始が午後後に迫っている。社内を見渡すと、他の四人もまだ作業中と見えた。

「たかが、社員の査定じゃないか」とはいえ、五人の力量が問われることになり、これこそが最初の人事評価に当た

ると言ってもよかった。一人が二分野ずつを担当し、同じ一分野の分をもう一人が担当するので、五人で合計五分野のシステムを立ち上げることになる。

持ち寄った試作のシステムにデータを走らせ、要点をチェックする。泰司の担当は、企画能力、判断能力、注意能力、実践能力、調整能力、指導能力、リスク察知能力、連絡相談能力、問題解決能力、業務改善能力、事後処理能力などのかかなり抽象的な能力をデータ化し、目標の度合いと達成度を見るという内容が狙いである。

上層部からは、能率、実行、挑戦、撤退、総括という抽象的な、大きな五つの目標項目のみしか与えられていないので、これまでに自分が培ってきた仕事のノウハウなどから、どのような事項を評価項目とすべきか、から作り出さねばならない。

もう一つの担当分野は、説明、折衝、契約、売上、利益人脈などという、かなり実務に即した内容だった。

五人には、システムの内容は自由に組むようにとの指示が出されているので、それぞれが他の仕事ぶりには何も触れていない。三日という期限内で下案を作り、第一歩から競い合うという仕組みである。

午後二時から、最初のシステム試作を持ち寄つてのプロジェクト会議が開かれた。

会議には五人のシステム開発担当者、人事部長、人事

課長、副課長、システムエンジニア三人が集まり、秘密会議として行われた。人事部長の挨拶では「システムが完成すれば、どの部門にも、工場にも、支店にも採用し、トッ

プから新入社員に至るまで人事の評価を付すもので、その評点を基準として個々の評価を行うことになる。このシステム作りはそれだけ重要なものであり、我が社の運営の基

軸となるものである」との言葉があり、人事課長からは、「五人は特別に選抜された者であるとの自覚をもち、定められた期間内にシステムが完成するよう精励してほしい」との補足が述べられ、それぞれが開発したシステムに具体的なデータを入れ、シミュレーションを行った。

結果は、五人がそれぞれに工夫をこらしただけあって、微細な差こそ見られたものの、かなりのレベルの達成度にあると言つてよかつた。部長も課長も、この調子で次のステップに移ろうと五人の肩を叩いて上機嫌で出て行き、会議は終わった。

次のステップは、今日のシステムで十分拾い得なかつた部位の修正と、全体を統括するシステムとしての整理統合であつた。これにはキャップを決める必要があり、五人の合議で、人事担当歴が長く、評価の準備に早くから関わつてきた後藤を選び、お開きとした。キャップを選ぶことは、この時点で行うことになっており、今後細かな事項は、後

藤が課長に報告すれば足りるようになっていた。

後藤は、次の会議を一週間後の同じ時間に設定し、それぞれが持ち場に戻つた。

三

美和子は飲んでも酔わない口だ。ビールの中ジョッキ三杯を軽く空ける。アルコール分解酵素が多くないのだろう。夏彦は、このあたりですでに大きな差を付けられる。美和子の場合、次には水割りと、お決まりのコースを辿る。

いったいこれだけの量が、どこに消えていくのか不思議である。夏彦はビールの途中で二回ほどトイレに行くのだが、美和子は全ての食事が終わった後で、と決めているらしい。

その後コーヒーになり、アパートに着く頃には階段を上るのも辛くなるのであるが、美和子はミニの太ももを見せ付け、五段ぐらい先を軽々と上つて行く。

美和子のアパートだからと言つてしまえばそれまでだが、三階までの階段は、普段エレベーターしか利用しない夏彦にはかなり辛い。おまけに、動いた拍子に酸っぱいものが胸に上がってきたりする。

美和子は飲むと奔放になるタイプで、タップを踏みながら階段を上り、玄関を大きく開く。

この玄関をくぐるようになって、半年になる。以前は、

夏彦のアパートに寄ることもあったが、設備の新しさで、美和子の方になわれない。シャワーも、浴槽も、洗面台も明るく、居室とは切り離された作りになっていて、女性の部屋の甘い香りが心地よい。

美和子は部屋に入ると、まずバスルームに駆け込む。纏っていたジャケツトもミニスカートも、下着もベッド脇の籠に脱ぎ捨て、強めの水量でシャワーを浴びる。ドアは半開きにしたままであり、湯気が居室に流れ込んで来るのであるが、空調を適度に入れれば湿気が籠もらない設計になっているらしい。「おしっこするのよ」と、最初にシャワーに掛かる訳を、そう話してくれたことがあった。

美和子は素裸のまま出て来た。胸の膨らみといい、腰のくびれといい、淡く隠れた下腹部のかたちといい、いつ見ても飽かない。

「義久、おしっこはちゃんと下向きに出るの」

美和子は義久という名で呼ばれても、動揺しなくなった。義久と呼ばれていた頃のことには知らないのであるが、レンタルビデオ店に勤めていた美和子と、探していたビデオの前で最初偶然にすれ違ったとき、そのあまりの澄明な印象にビデオを取り落としてしまった。

「私の袖が触れてしまったようですね」

美和子は白い頬を微かに染め、「阿弥陀堂の狭霧」のビデオを拾い上げ、真っ直ぐに夏彦の目を見た。そのとき、

美和子のタイミングを見計らい、背中から声を掛けた。「お茶でもどうぞです。瀬音のせせらぎの話、もう少し聞かせてもらえませんか」

美和子はゆっくりと頷いた。夏彦は、では六時に、ムックでと言った。三日の間に美和子の正確なシフトを調べ、退勤時間も知った。

夏彦はショルダーバッグを隣の椅子に下げ、モカを注文した。未だにコーヒーマシンの味はわからない。この街の風景をどう切り取るか、そのためには誰に会うべきかについて、いつもこの店で考えを巡らせることにしていた。

最近にわかに現実味を増してきたとされる、レンタルビデオ店の大型店舗化と中小店の廃業の実態、という切り口もまず悪くないなど考えたのだった。

しかし、美和子の出現は予想しなかった。夏彦がイメージしていたレンタルビデオ店の醸すざわめきと、美和子から放たれる、澄明な美しさとがうまく調和しないのだった。美和子は六時きっかりに現れた。仄かな水仙の香りが、いく分強く感じられた。ジーンズに、カジュアルなシャツという恰好である。美和子もモカを注文した。

「このお店のモカ、丸みがあって玄人好みなんです。常連の客が、わざわざ車で遠くから来てくれるらしい。もつとも、マスターの手柄に惹かれて来るのかも」

夏彦の身内でざわめいていたものが一瞬に吹き寄せられ、渦の中心に巻き込まれたのだった。

「水のせせらぎが、聞こえて来そうな作品ですよ。とても明るい瀬音です」

原作を読んでいたの、それだけの説明で十分だった。それより、彼女がこの作品の内容を、簡単な言葉で言い切ることに興味を抱いた。

美和子はビデオを夏彦に戻すと、コーナールの奥に消えて行った。後に仄かな水仙の香りが残った。

美和子の美しさは、際立っていた。普通の美しさを通り越し、桜花にも似て、すぐに散り落ちてしまいそうな危うさを感じさせた。これほど目を引く者が、ビデオ店に勤めているということが信じられなかった。

夏彦は店に言い詰めた。美和子はいつも、立ち止まって眺めずにはいられない輝きを見せた。客たちもそう感じているのだと思った。

しかし、客たちは何故か美和子の前を黙って通り過ぎ、他のレジに並んだ。

美和子をそれと見ているのは、美和子の醸し出すオーラをキャッチ出来る者に限られているようで、美和子の前を通り過ぎるのも、オーラのせいかもしれないと思った。

「よかったら」夏彦は旧作ビデオの棚でビデオを並べてい

マスターは禿げ上がった頭を光らせ、三日ばかり剃らないと見える髭のまま、ネルドリップで淹れてくれる。淹れる時間や手順は、どんなに店が混んでいようと変えないという。どうかすると、話し掛けても相槌すら返さないというぐらい、自分のペースを崩さない。それで、逆にファンが離れないと言うから、かなりのものだ。

店の隅には、パソコンと格闘している者、厚い本に集中しているらしい者がいて、一向に動く気配がない。

「明るい瀬音って、どのあたりを指していることですか」

「全てです。木立を漏れた日が水に光っています。木立そのものにも音があり、水の音が絶えず聞こえてきます。水の音が光っている。ヒュルルとか、ルラルラとか、チロロとかそんな音です。風景の全体が鳴るんです。たくさん森の精霊たちが、奏でているんです」

夏彦は読んだばかりの「阿弥陀堂の狭霧」の原作を思い出し、そうかも知れないと思いが、テーブルに置いたビデオのケースを眺めた。

「ビールで喉を潤しませんか。お近付きの意味も込めて」これまで女性から誘われたことは、夏彦には経験がなかった。それより、美和子のように目に立つ風貌の女性の傍で時間を過ごすことが、自分には耐えられるだろうかとの心配の方が先に立った。

「気取らない、とてもいいお店があるんです」

ムックを出ると、近くの紫陽花という居酒屋に入った。衝立で囲まれた十ほどのスペースと、かなり広い畳の間が二つあった。美和子は畳の間の方に向かいかけ、思い直したのか四人掛けの衝立の方を選んだ。美和子が明かりを落とした側に座ると、余計に色白の目鼻立ちが浮き上がった。

美和子はジョッキを三杯以上重ねても崩れなかった。料理は、枝豆、揚げだし豆腐、ししゃも、焼きおにぎりといったところだった。

美和子の部屋に寄った。こうなることがわかっていて、というほど自然なことだった。

美和子はシャワーを浴びると、バスタオル一枚で椅子に座った。夏彦も汗を洗い流すと、バスタオル一枚のままに傍に寄り、美和子の背中から手を回し、豊かな乳房に触れた。指が滑りそうなほど、肌理の細かい肌だった。

長いキスを交わし、ベッドに横になった。夏彦は骨が砕けるかもしれないというほど強く美和子を抱き締め、二度の激しい波が去ると仰向けになった。

「今も雲の中を漂っているみたいだ」

美和子はふいに顔を覆った。胸にタオルケットを掛けたままで、鼻声になった。

夏彦の胸に強く過ぎるものがあった。

けど、この横顔の角度、胸の隆起、肩のすばまり、ウエストの締まり、上向きヒップの形と、形ばかり追っているようだけど、ぼくのカメラは美和子の魂まで映し込んでいるつもりだ。美和子の美しさはちつとも変わらない」

かつて、スキヤンダラスな報道をされ、身も心もはずたになつていたときの美和子、雑誌の表紙を飾っていたときの美和子、救急車に担ぎ込まれる美和子がいたということを知らなかった。勿論、平松義久がかつての本名であるということも知らなかった。

夏彦は、美和子がこれらの仕打ちを受け、暴力的に姿を晒され、傷を負わされる度に、せせらぎの音を高めることで、かろうじて自らを漱ぎ流して来たのだらうかと考えた。夏彦は美和子の腰をやさしく抱き止め、美和子の内奥から発してくる、水仙のやわらかい香に静かにひたつた。

四

泰司は三日後に迫った人事評価システムのシミュレーションに向け、深夜までキーボードを叩いていた。

先日の第一回目のシミュレーションは、若干の修正点は見られたものの、ほぼ目標に迫っていると言ってよかった。これらを微修正し、システムの全体を統合させる。今の段階での問題点は置くとして、昨日今日泰司が感じているのは、こういう画一のシステムで、はたして生身の人間の評

「やはり」

美和子はゆっくり頷いた。

「あなたには、ちゃんと話せそうな気がしたの。いえ、そうしないといけないわ」

「何言ってる。話なんかいらぬ。聞こえたよ、僕にも。」

深い山の奥の風景が奏でる明るい瀬音が、はつきりと

美和子は透き通りそうな肌の色を見せたまま背中を見せ、しばらく息を止めていた。

「義久、とても綺麗だよ。出会ったときから、少しも変わらないな」

「その言い方、かなり残酷じゃない。私、しっかりと変わってきたわ。あなたのカメラに出会う前から、何度も何度もマスクミに担がれた。週刊誌の興味本位の書き方。体のよい見世物扱い：もう傷付き、睡眠薬、リストカット」

美和子の言うことは事実である。しかし、事件を乗り越える度に、美和子の気持は洗われ、瀬音の流れるイメージは少しずつ深まりを見せて行ったという。

「いろんな人を知った。けれど、今はやっぱり夏彦の胸に飛び込むのが自然だわ。ビデオショップで出会ったことが、全ての始まりで、全ての終わりなのかも知れない」

「美和子はこの誰よりも素晴らしい女だし、このカメラに捉えるのは美和子でなければならない。肌も素晴らしい

価が行えるのだろうか、というものだった。

これまで、経理システムや、物品販売購入システムなどを見る時には感じることもなかった、微妙な視点のズレをにわかには感じ始めていた。売上額の多寡、目標設定と達成状況の違いなどは数値化することに違和感はないのであるが、企画能力、実践能力、調整能力、リスク察知能力といった能力を、与えられた指標に向かって数値化することが、果たしてあるべき姿であるのだろうかと考え始めたら、思考が鈍ってくるのが否めなくなった。

大学院を出て、人事管理、労働経済というテーマを中心に研究を深め、同時にプログラミングについても専門学校で詳細に学んで来たつもりだった。

何だろう、と泰司は首を捻った。会社の中での地歩はまず順当に築きつつあったし、近い将来家庭を持ちたいという相手にも恵まれていた。大学の一年後輩の亜希とは、今も三十分近く電話で話した。締め切りの仕事があれば亜希はこの部屋にいて、今頃の時間はワインやビデオを楽しんでいる筈だ。

亜希は司書だから、願い出れば休暇も取れ、週一回の音楽サークルにも行けるという職場にいる。残業もなく、仕事帰りに映画を観ることも出来る。

しかし亜紀は、「この頃、泰司がちつとも近くに見えないのよ」という妙な言葉で電話を切った。

泰司は、疲れているなど独りごちた。

先日の通勤時に出食わした男のことを考える。あれは自分だった。いや、自分にそっくりの男だった。世の中には似た人間が三人はいるのだと聞いてはいたが、あれは自分そのものだ。髪を左から右に撫でる仕種、表情、声、歩き方のどれをとっても自分ではないかと考えた。そして、そっくりな人間に出会うことは良い知らせではない、というどこかで聞いた占いの話を思い出した。

よく似た人間というのは、どうして生まれるのだろう。以前、自分は別の空間の同じ時間帯にも生きていて、たまたま背中合わせになったりするのだ、などと想像を膨らませていたことがあった。少なくとも複数の個が、一緒に動いていると思っていたときがあった。鏡の中の自分を見る。この自分と同じ自分が同じ空気を吸い、ときにはふらりと離れて違う街に出る…。

鉢合わせになった通勤時のあれは、どう見ても自分だ。これも、直感でしかないのであるが、相手の気持がまざまざと読めたのだった。

「何で、選りに選ってこんなところで会うんだ。けつたくそ悪い。今は誰にも会いたくない鬱陶しい気分だ。ましてや、自分自身に会うなんて、冗談じゃない」

と読めたのだった。泰司自身も同じ気持だった。泰司が自分には複数の自分がある、と思い始めたのは、

た。数年前に、盲腸を薬で散らしたことを思い出した。「無理をすると、また出ますからね」初老の外科医が言っていたことが、今来たのだと思った。

予備校の門を出て五百メートルのところに小さな外科医院があった。すぐに行かなくては、と体を起こした。そのままでは立つことが出来ないで、普段素振りに使っている木刀を杖替わりにして、部屋を出た。

アスファルト道で何度も転げた。頭から転げ落ちたり、交差点にしゃがみ込んで、しばらく動けなかった。外科医院のガラスを押す恰好で、ようよう転げ込んだ。手術着に着替えたばかりだと見える若い外科医は、スケジュールを確かめ、「明日午後一時に手術だ」と告げ、扉の奥の手術室に消えて行った。

来たときの二倍近い時間を要し、寮に帰り着いた。ベッドに横たわると、痛みが一箇所を指し、移り始めるのがわかった。右腹部の一点を指し、不吉なものたちが闕の声をあげ攻め寄せて来た。一箇所痛みが収斂すると、それは腸を穿つ痛みとなった。痛みの箇所を手の平で押し込め、海老の形に体を丸めた。刺し込み、振れてくる痛みだった。息が出来なかった。外科医院までの往復が、急激に症状を進めてしまったのだとわかっていった。

診察前の検査のとき、看護婦が身震いをした。血圧二百

幽体離脱というものを経験し、空から自分を見下ろしたときからである。

予備校の夏が過ぎ、九月の声を聞いたばかりだった。現役の頃より一ランク上の受験を目指していた泰司は、一日に三時間しか眠らないという計画を立て、順調に八月を駆け抜けた。偏差値も順調に伸び、これから本場の肉付けをしようと、ギアをトップの状態に切り替えたばかりだった。ところが、八月の暑さが少しも収まらないままの九月の午後、激しい目眩に襲われ、机に崩れ落ちてしまったのだ。空調のない教室であるためか、体中の熱を放出してしまおうというためか、夥しい汗を机の板に流していた。

午前中までの、普段と変わらない、むしろ快調過ぎるほどの体の軽さが、突然に失せた。

急ぐ、地面にめり込みそうなほどに体が重たかった。寮生の二人に両脇を抱えられ、自室に戻りベッドに横たわった。二段ベッドがじぐざぐに回っていた。体が分解してしまい、あたりに飛び散って行く思いだった。目を開けていることが出来なかった。目を閉じていることも苦しかった。自分でも、何が起きたのかわからなかった。ただ寒い。毛布にくるまり、体を精一杯折り曲げた。腹部に鈍い痛みがあった。焦点の定まらない痛みだった。ドロリと粘りのある汗が、体中を包んでいた。

「外科に行かなくては」自分の内側からの声が、耳に届い

二十、体温四十一度と書き込みながら「本当に大丈夫」と聞いてきた。歯をガチガチ鳴らしているのを見て、「寒いね。外は三十二度の暑さなのに」と、医院を出る泰司をドアの外まで、見送ってくれたのだった。

食欲などなく、水も受け付けなかった。熱があるのに、体の芯が冷えきっていた。冷たい汗は止まらない。敷き布団も、毛布も、絞れば水滴が滴るほどに濡れ通っている。

寮の廊下に足音が乱れる。午後の授業が終わったらしい。「俺の部屋に泊まってけ」、「何言ってるのよ、勘違いしないでよ」と嬌声を発する。

遊び人たちは元氣だ。と呟いていると、スウーツと気が遠くなる。まずい、と思ってベッドの手摺りに手を伸ばし、少し長く息を吐く。手を放すと、仰向けの姿勢であったのが、振れ加減に崩れ落ちる。途端に、圧迫された腹部が悲鳴を上げた。

泰司は寮の天井を突き抜け、屋根を突き抜け、一気に空に駆け上った。寮の赤い屋根が消しゴムの小ささになった。寮を、予備校の建物を、校庭を見下ろしている。寮の一室には、泰司の体が海老状に折れ曲がり、頭を抱え込んでいた。動かない。

空は晴れ渡り、九月に入ったばかりの太陽が分厚い光を投げている。予備校から帰る生徒の列が、川縁の道に長く伸びる。何かのマイク放送がなされているらしく、校門の

階段の辺りに立ち止まっている者もいる。

「県下一斉模試が行われます」

という言葉が聞き取れた。今回の県下一斉模試で第二回目の志望校の判定をすることになっていた、ということを書いて出す。前回は今一步という結果だったので、今回は入念な準備をして臨もうとしていたのだった。

空に浮かんだ泰司は、九月の太陽を銀色に反射している河口の方に移動した。気持をその地点に持って行きさえすれば、直ちに動けるのだった。デパートの上空に立つ。この街でもっとも高いビルであるデパートが、ずい分下にある。上空から見下ろしてみれば、小さなマツチ箱を、行儀よく並べた恰好に見える。市民病院だって、地方裁判所だって、平べったい地図を広げて見ると変わらない。

九月の太陽は、空の中心にあり、激しい勢いで燃えている。どこかで教会の鐘が鳴っている。

「川上、どうした、しつかりしろ」

いきなり、足を挿んで強く引き下げられる。寮の屋根を潜り、天井を潜れば、自分の部屋だ。相部屋の「日高が、たいへんだと駆け込んで来たんだが」と寮監がベッドの下から伸び上がっている。普段は顔を合わせても挨拶もしないのだが、さすがに急病人と聞いて飛んで来たらしい。

「明日手術です。入院準備は自分で、今からやります」

「そうしてくれ」と、寮監は面倒なことはごめんだとばかりに、

りに、五分も経たずに出て行ってしまった。

日高も寮監と一緒に、電気を点け放しにしたまま出て行った。そのままベッドに丸くなる。腸を揉み込み、振り千切っていく痛みだ。息が止まり、気が遠くなる。

何とか手術の準備を整えねばならない。保険証、下着、洗面具、と考えたところで、ベッドから跳ね上がらねばならないほどの痛みが襲う。明日午後一時までの、途方もない時間の長さを思った。そして、五百メートル足らずの外科医院までの距離の遠さを思った。

「忘れるところだった」泰司は急いでポケットを探った。痛みが激しいときに飲むようにと渡された錠剤があったのだった。汗にまみれた三錠のうちの二錠を歯で食い千切り、そのまま噛み砕いた。

荷物を引き摺り、一時間近くかけて歩いた。外科医院のガラス戸に倒れ込むと同時に、泰司は意識を失った。

麻酔が一時間で切れた。

「たまらんな」医師が言った。「癒着がひどい」医師の声は沈痛だった。

麻酔の切れた腸を手で探り、癒着した箇所を一つ一つ丁寧に剥がしていくらしい。

「俺の方が気が遠くなる」医師は泣き出しそうな声をあげた。手術室には医師が一人、看護婦が一人である。

泰司は腸を動かされる度に、呻きをあげる。神経が揺さぶられ、引き裂かれ、引き抜かれる。悶絶寸前の痛さである。声を出そうにも、声にならない。「やるしかないんだよな、とにかく。やっこさん、ちゃんと息は通ってるか」

看護婦が計器の方に回り、脈拍は幾つで、血圧が幾つで、という数値を読み上げる。

「わかったよ」医師は呼吸を整えるため、深呼吸を三度やり、首を回した。

「ちゃんと生きてるよ。こっちの作業は君の息のあるうちに終わるか、終わらないかの瀬戸際なんだ」医師が腸を振り上げたのか、全身に猛烈な痛みが走り、あまりのことに息の根が詰まった。

このとき、自分の体から抜け出した泰司は、天井のあたりに浮いていた。下に術衣を着た医師と看護婦が、緩慢な動作で立ち作業をしている。麻酔が切れて、二時間が過ぎた。都合、三時間が経過したことになる。

「脈拍が弱まりました。血圧も落ちていきます」

医師は答えない。「なるようにしかならんさ」と呟きながら、流れ落ちる汗が目にも染み入るのも構わずに細かな作業を繰り返す。

泰司の体は手術台の上で動きを止め、手足は投げ出している。顔色は青というより、黒ずんだ白だ。呻きもしない。

「よくありません。呼吸が」

「これしか方法がない。行くぞ」引き抜いた手袋には、血潮が貼り付いている。医師は生け花で使う剣山様の金具を、手術台の泰司の足裏に突き立てた。一度目は躊躇していたが、二度目は力いっぱい突き立てた。

外科医院の上空高くを、全てから解放された静かな気分が、ゆっくりと漂っていた泰司は、激しい衝撃に、足裏から引き下げられた。

「何で引き下げるんだ」と舌打ちしながら、泰司は手術室に戻って来た。医師と看護婦が無然とした顔で立っている。「駄目だ。手遅れだったよ、もともと」

「仕方ないですね」看護婦が計器を外しに掛かった。そのときに、体内に戻った泰司は「ムウツ」と唸ったのだった。手術室から出掛けていた医師が、あわてて駆け戻った。

新しい手袋に指を通すと、開腹したままの腸に飛び付いた。「ならば、最後の賭けだ。後、三十分」

後三十分と聞いた泰司は、かろうじて気持を切り替えることが出来た。看護婦も、「三十分なのですね、後」と気合いを入れてきた。

泰司が自分の体から抜け出し、上空を彷徨っているとき、下に見える自分は紛れもない自分であるが、その周辺や、見えないあたりにも自分の存在が数体あるのを感じた。

一体は隣県の公園で、芝生に寝そべったまま建物すれすれに飛ぶ飛行機を見上げ、時折ニコンのカメラを向けたりした。後の一体は、上空から見渡しても見えない箇所にいるのか、微かな信号だけを捉えることが出来た。

泰司は、自分と同じ波動を発する個体が複数体あるのだということを知り、初めて知ったのだった。

五

その一人であるのだろう男に、通勤時に出食わした。目も、鼻も、声の調子も、自分が鏡の中の自分に向かって喋っていたのだという思いも、未だに消えない。

携帯が鳴った。亜希である。今夜二度目のコールだ。

「先ほどは、言い出せなかった。大丈夫かしら今」

「丁度お茶でも飲もうか、と考えていた」

「じゃあ、勇気を出して言うわ。泰司さん、最近レンタルビデオ店によく行くの」

「レンタルビデオか、残念ながら最近御無沙汰だね。何せ、システムの仕上げに全てを打ち込んでいる。大袈裟でも何でもなく」

「だったらいいの」

泰司は、先日出食わした夏彦という男のことを思った。

亜希は夏彦のことを、自分と勘違いしているのだ。

「つまり、レンタルビデオ店に日参して、お目当ての美人

とデートしているとかいうやつだな」

「どういうこと」

「僕の言うことが信じられるかな」

「られないと言ったら」

「困難なことになるな。しかし、僕には説明出来る」

「聞いてから、答えてもいいかしら」

「大丈夫だ。話は実に簡単なことだ。信じてもらえればということだけど。彼の名前は井川夏彦。旧式のニコンの一眼レフを肩にして、街の風景を撮っている。髪は左から右に流し、言うならば双子の僕だ」

「泰司が双子」

「双子かと目を瞠るぐらい似ている。いや、僕と同じDNAを持つ男。夏彦は仕事で、レンタルビデオ店を毎日訪れる。目当ては、ビデオ店の実態の観察であり、美人の店員の観察でもある」

「知ってるの」

「夏彦とは、つい最近出会った。ビデオ店のことは、僕の憶測に過ぎないが」

「泰司自身ビデオ店には行っていない、ということを知ると言うの」

「そうとしか答えられない。君がどう思うと」

亜希は黙ってしまった。「わかったわ」亜希は低い声で呟くと、向こうから切った。先の電話のときには全く触れ

なかったのだが、言い激んでいたのだろう。こんなとき、亜希はすぐに訪ねて来る。自転車五分とかからない。ドアの外に足音が近付いたと思うと、チャイムが鳴るのだ。しかし、三十分待っても、一時間待ってもチャイムは鳴らなかった。明日の資料の準備で忙しいのよと言っていたから、それはそうだろう。亜希は司書仲間同士での研修会を、仕切っているらしい。

亜希は二時間が過ぎ、午後十時を回ってからチャイムを鳴らした。資料の準備が終わったから出たのだと言う。

部屋に入ると、バスルームに入った。自分の着替えを、いつの間にか戸棚の奥のケースに揃えている。もっとも、ふいの客(例えば、母)が来ても、簡単には目に付かない場所に工夫して置いている。

ベッドに入ったのは亜希が先だ。泰司はパソコンから離れられずにいたが、途中で切り上げシャワーを使った。

まもなく十二時というところだ。部屋の照明を落とすと、亜希の待つベッドに潜り込んだ。亜希とは、彼女が高校に入ったとき以来の付き合いだから十年を越える。

「夏彦さんて、どんな人」

と聞かれても、彼には一度出会っただけだ。DNAが自分と一緒に言ったのも、泰司の一方的な思い込みでしかないのかも知れない。泰司にはそう答えるしかない。

「実はね、この数日の間にレンタルビデオ店で二回会ったの。泰司だと思って手を上げて知らんぷり。それが五日ぐらい前のこと。馬鹿にしないでよ、と声をあげるところだった。昨日など、新作コーナーで目を見合わせる距離にいるのに、表情も変えない」

それは感じ悪いものよ、と肘を突いて来た。気乗りのしないままに聞いていたが、そんなことなら自分にも覚えのあることだった。

会社の連中とビアホールに繰り出したときのことだ。客の中から、目映いばかりの美女が抜けて来て、「お友達なの。珍しいわね」と声を掛け、去って行った。後藤などは「お前も隅に置けねえな。どこであんな美人と知り合いになった」といつまでも去った女のことを聞いてきた。

そのときは全くうわの空だったが、考えてみれば自分も、夏彦と見間違われたことが度々あったのかも知れないのだ。「そういうことなの。他の人たちも、夏彦とかいう人と泰司を何度か間違えたって訳ね」

泰司は指を折って数え上げてみた。そうすると、これまで気付くことなく奇妙な角を曲がって来たのかも知れないと思えて来た。

六

夏彦は、美和子の勤めるレンタルビデオ店に通い詰め、

美和子の表情を追った。

朝礼時の緊張気味の青白い表情。特に激しく肌を重ねた朝の気怠な表情。柵にビデオを収めるとき、近付き難いほどに真剣な表情。客の前に立つときの、目映いほどに深刻とした表情。

美和子は準正規社員という扱いにあるものの、ビデオに触れることが出来るということだけで、それ以外のことに興味がないと言う。ビデオは、振れてしまった自分と向き合ったときにも、殆ど裏切ることがないからだそう。

「平松義久という名前のために、ずい分泣いた。自分ではどこにいても女だと自覚しているのに、許してくれない。親がそう。お前は長男だから、しっかり自立しろ。親の面倒ぐらい見るのが当たり前。母とは、朝に夜に喧嘩。自分は女だから、母の女々しさがよくわかるのよ。あまりにも頑固。あまりにも勝手にしつこいので、刃物を持ち出した

りもした。それに学校ときたら、めちやくちやひどい」
 中学までは男子の制服を着せられ、トイレも男子用に入らねばならない。そのうちに胸が大きくなり出し、声の質もそのまま変わらなかつたのだそう。

中学を出ると、三年間コンビニのレジに立ち、食べるものも食わず、必死に資金を作ったのだと言う。

「憎い憎い、この突起を切り落としたの。その後の造形も、抜かりなくやった。完璧に女に転換したつもりなのに、男

として過ごしてきた日々が、どこまでも追い掛けて来る。

名前を変え、生まれ故郷を捨て、誰一人顔見知りのないこの街で暮らし始めたのに、酔ってしまつと、つい昔の癖が出たりするの。自分ながら、いつたい何度バカじゃなにかしらって思ったことか。トイレに入ることそれ自体がDVになつてる。嫌で嫌で仕方ないのね。それなのに、啖

呵を切るとき、男言葉に戻つてしまふ。血の気が多かつたせいもあるのかしら、見境なく刃物を握つてしまふ。

バカバカしさ、くだらなさに自己嫌悪に陥り、酔い潰れ、リストカット。でも、その度にどういふ訳かすぐに発見され、救急車の世話になつた。七回かな、八回かな」

ハハと笑い、綺麗な顔を歪ませ、止まらない涙をハンカチと手の甲で拭う。

「大柄過ぎるし、顔付きだつて宝塚だものね。自分のビデオをいつも眺めるんだけど、だんだん人造ロボットみたい

に変わつて行くの」
 「冗談はよせ。もつと自信持てよ、と言うのも酷か。僕が美和子の気持の裏に分け入るには、役不足だよ」

「これでもね、今が始まりなんだ。これからだつて、懸命に思い直そうとしてるのよ」
 「DVを簡単には治せる訳がないということとは分からないではないけど、ロボットという言い方はよくないよ。うま

くは言えないけど、目が覚めるような美人だよ」
 分かつてほしい。それだけなのに」
 「それが選りに選つて、長男である平松義久だつたんだ」
 「母のこと、決して許せやしない。母の目の冷たさ、肉親

という血のおぞましさ」
 美和子の醸す水仙の香りや、深山の清流の瀬音を聞き分ける感性とは、まるで異なつた默的な部分が、美和子のうちに同居し、強かに息づいている。

目を睜らせずにはいない美和子の表情を、様々な角度から追えば追うほど、そもその夏彦の思惑であつた、レンタルビデオ店の大型店舗化と中小店の廃業の実態、といつ

た平板なテーマに組み込むにはそぐわない、ということ

痛く感じ始めた。

七

人事評価システムが完成した。

部長、課長、副課長と五人の開発メンバーとで、会社とは二街区ほど離れた、普段は行くことのない居酒屋で、ささやかな慰労会を行うことになつた。課長がプロジェクトチームの解散を告げるに当たつて、このままといふ訳にはいかないのと部長の賛同を得て、決まつたのだつた。

「まだこのシステムがオープンにはなつていないから、そこを踏まえた上で」と言う部長の意向に添い、副課長が寄つたことがある紫陽花という店に繰り出すことになつた。

「みんな振り返つてくれたりするけれど、その心は、やっぱり何かが違う……なのよね」
 「美和子の気の回し過ぎも、ないではないな。とにかく綺麗だよ、文句なしに」
 「だからって、本物にはなれない」
 「気分を害するかも知れないけど、本物以上だ。こうして、特にレンズを通して見ると」
 「以上でも以下でも、どうでもいいの。真実はどうであろうと、本物ではないのよ」
 生々しく残っているリストカットの跡を見せた。
 「どこかがおかしいと思うんだけど、そのどこかがわからない。セックスも並で、子供も生めて、という欲張つたことなど望んでいる訳でもないのに」
 「自分は何者で、何故こうなんだろう、という悔恨が先にあるということ」
 「近いかも知れない。仮に今選ぶ自由があるのなら、普通でいい、子供の出来ない体質でもいいから、やっぱり本物を選ぶわ。普通の女を」
 「普通でありさえすれば」
 「そうばかりも言つてられないけど、今でもテレビにどうだ、週刊誌にどうだ、君は特別だから。なんて声を掛けてくる連中がいる。そんなとき、体中の血が逆流するの。やっぱり普通でありたい。当たり前でありたいということ

静かな居酒屋の奥の一室で、形だけの慰労をし、落ち着く間もなく座を立つことになった。

出掛けに、泰司はふと奇妙な感覚を覚え、背後を振り返った。同時に、相手も泰司を見返した。夏彦だった。一人片隅で飲んでいるという恰好だった。

幸い会社の連中は店の外に出ており、夏彦の存在に気付いた者はいないと見えた。

「今日のところはこのあたりで切り上げ、晴れてオープンるときが来たら、華々しくやろうじゃないか」と言う課長の声に従い、ここで解散することになったため、泰司は頃合いを見て、再びドアを開けた。

「しばらくだな」夏彦が隣の席を空けた。店員が奇妙な顔で二人を見詰めるので、「ああ、双子なんだ。最近、めつたに会うこともなくてね」と泰司が説明した。

「全く俺自身だよ」二人が交互に言った。

「何となくだけど、今日ここで出会いそうな気がしたな」と夏彦。「後ろから気配を感じていた。座っているときから」と泰司。「俺は福岡だけど、君はいつたいてこの出身だ」と泰司が聞く。

「長崎だ。離島だけだ」

「長崎には千もの島があると言う」

「その一つさ。石を投げればどれかの島に当たる。福岡はどこだ」

泰司は、「俺たちも親の願望に沿うように強烈に絞られたもんだ。塾だ、偏差値だとね」と言い、結局似たようなもんだよ、とコップを合わせた。

「生まれたからには、この世界の仕組みを突き止めようとか、社会の役に立とうとか、世界の果てまで行ってみようとか考えるもんだろ、人間。それが、親の逆鱗に触れる。余計なことはしなくていい。家のこと、親のことを考えるのが子供の努めだとね、離島では」

「確かに、世の中は難しい。熾烈な競争の中を泳いで行かねばならない。自分一人の体さえ持て余しているのに、これに親が被さって来たら、潰れるのは目に見えている。時代のせいにはしたくないけど、時の動きが猛烈に速い」

「親年代の口癖である、昔はこうだったから同じようにしろと言うのは頭ではわかっても、実行出来ない。親が何か言う度に、死ねと脅かされているとしか考えられない。多分俺たちはこの世の終りに生まれて来たんだと思う。親や地域に責められ、自分自身からも責められる。俺の居場所などどこにもない」

夏彦は二杯目のジョッキを飲み干し、三杯目に挑んだ。

泰司も、三杯目を空けようとしている。

「ところで、君はレンタルビデオ店に入り浸っていると聞く。目的は何だ」

「レンタルビデオ店の大店舗化と中小店の廃業の実態とい

「炭坑町だ。今は草原に変わっているけどね。気が荒くて、女が強い。男は女の手の平の中で転がされている」

夏彦はジョッキ一杯を飲んだばかりとみえ、泰司も口を潤した程度だったから、飲み直すことにした。運ばれてきた中ジョッキで乾杯すると、互いに顔を見合わせた。

「真正正銘の双子だよ。お袋さん、一方が盗まれたと言わなかったかい」夏彦が聞く。

「生年月日はどうだ」泰司が聞く。

生年月日も違い、双子の兄弟が盗まれたという話もない。「俺は専門学校出だ。君は」夏彦が聞いた。泰司は、二浪はしたけど一応この地域では最上級クラスの大学を出ている。「同級生にはもっと上がいるから、中の中ってとこだ。会社はこの地場では、何とか幅をきかせているけどな」

「ずい分違うもんだ。俺らの場合、離島から大学に入ると、逆さまになっても有り得ない。そんな考えもないし、ゆとりもない。親に逆らって出て来たものの、当面どうやって食って行くかは別として、先は全く霧の中だ」

夏彦は十年も親とは連絡しないし、その気もないと言った。「島の親たち、自分たちの子は自分の所有物だと勘違いしている。子供はいつでも、親の担ぎ手になるなんて妄想を抱いている。勝手に期待される子供は人身御供ってところだ。つまり、子供は親の道具というやつだ」と、枝豆を口に放り込む。

う切り口で、情報収集をしようと思ってる。いや思ってた、ということだ。俺の唯一の飯の種でもあるんだが」

「俺の知り合いが、君を俺と勘違いして、えらい機嫌を悪くしてな。もつとも、君と俺を見間違ふことは誰にだってあり得る。ところが、君はいつもすごい美人と夜の街に消えるというから、俺の身はひどく危険だ」

「俺が単なるスケベ心で美人と付き合っていると思うか。こんな何の取り柄もない俺がよ。何かのボランティアでもない限り、続く訳もないだろう」

「ということは、話は事実なんだな。どういう訳があるうとなかるうと」

夏彦は内ポケットから携帯を取り出すと、フロント画面の写真を泰司の前に差し出した。

「この子のことだよな」

泰司はプロの女優にも勝る姿の写真をみると、「すごい美人だ」と唸った。

「まさに素晴らしい、の一言だよ」

「それなのに」

「それなのに、どうしろと言うんだ。彼女は、リストカットを八回もした。何でだ、と言いたいんだろう。彼女は自分を呪い、人を呪い、既に何十人も殺している、多分」

「どうして止めない」

「止められないのか、という意味か。止められるなら、俺

はもうどうに彼女の元を去っているさ」

「警察へは」

「意味をなさない。警察が逃げ出すだろう。それほど猛烈だ。猛烈な獣の猛りだ」

「受け止められるのは君だけなのか」

「分からない。君の方が向いているかもしれない。事実、君と俺となら、どちらが彼女に向き合ってもいい訳だ」

「分からないな」

「ついでに言うと、彼女の元の名は、平松義久と言う。彼女、つまり美和子は、毎晩酔うと母を殺すのだ。自分をこの世に生み出してくれた母をね。義久の時代の彼女は、母のお気に入り、長男でね、どれだけ母のために働いてくれるだろうかと期待され、躰をされ、ずい分激しく当たられたらしい」

八

泰司は遊歩道を二往復した。花の時期が過ぎたソメイヨシノの並木には、青葉が吹き出している。川面には家鴨が十羽ほどいて、温かな日射しを浴び、水面に影を映しながら水の輪の中を泳いでいる。

県内有数の公園の内に設けられた県立図書館の昼時は、花を眺め、公園を散策する人々が群れている。噴水が高く上がり、すぐ裏手が波打ち際であることから、潮の匂いが

新しい。

ライトブルーの事務服のまま、亜希が横手の通用口から出て来た。ウェーブのかかったロングの髪が、海からの風に揺れる。

「待たせたわ」陽の光の中で見る亜希は、滑らかに光る肌をしている。そのままベンチでというのも悪くはなかったが、建物の離れの喫茶室まで並んで歩いた。窓際の席に向かい合うと、レギュラーコーヒーを注文した。

「僕が夏彦だと名乗ったら」

「悪い冗談ね。ちゃんと証拠があるのよ」

「真正正銘の夏彦だと名乗っても」

「ええ、泰司の右頬と耳朶には小さな黒子があるの。それに、右巻きのオーラ」

「右巻きのオーラ」

「私だけの秘密。ビデオ店で会った夏彦さんには、黒子もなく、オーラが立っていた」

「出鱈目は止してくれ。オーラが何だとか。僕は本当の夏彦なんだ」

「ビデオ店で二回ほど会ったのね。そりゃあ、どきりとするほど二人は似てるわよ。でも、夏彦さんの目は少しだけ落ち着きがなく動くの。もともと、例の美人の観察をしながら、懸命にカメラで追っていたところもあるわ。本当に、彼のオーラには上に昇るものがあって、泰司との

違いは明瞭よ」

「では、何で僕がビデオ店に入りびたっているんじゃないかと邪推したりするんだ」

「それが女心というものでしょう。泰司のことに一パーセントでも疑いがあるようだと、眠れやしないんだから」

「いつものテスト台に乗せられているという訳か。それはともかく、幽体離脱を経験したりすると、人の認識というものも著しく変わったたりするという事例があるのだろうか」と、本気でね。インフォメーションで尋ね、資料検索という道では専門の、亜希に頼みに前にも出向いたことだった。いや、そんな類の本はいくらも読んでいる。その同じことを、今日もまた亜希本人に聞きに来たって訳だ」

「今度は私にテストということね。でもこれは以前にも言ったと思うけど、私に聞くより、幽体離脱体験者である泰司自身の胸に聞くか、あるいは、リストカットを繰り返すという美和子さんの方に聞いてみた方がよくはなくて」

「亜希はコーヒーを飲み終え、珍しく自分の答えを保留した。普段の亜希は、十年以上の付き合いであり、同じ大学の先輩後輩ということもあるのか、自説を主張するとき、途中で譲ったりなどしないのであるが、珍しく話に加わろうとせず、問題は美和子にあるのだからと、そう勧めた。」「いいのかい。今夜の予定はなしで」

「泰司が聞くと、「今日は女子会で、隣の鍋に行くの。」

だから、構わない。泰司だって、美和子さんに引き留められる可能性もありね」と笑う。じゃあそうするかと立ち上がると、亜希は泰司のスーツの上から力まかせに振り、次の瞬間には後も振り返らず、足早に部屋を出て行った。

九

美和子は袖をまくって傷口を見せた。十センチ近くに達するものもあり、どれもが生々しい茶色のぬめりを帯びた筋になっている。

「見てどうするの」

「泰司は、美和子の気持を頷うなづれさせることになりはしないかと案じた。両手に三本と五本。左利きなのか、右手首の傷が二本多い。」

「ありがとう。もう仕舞ってくれていいよ。済まなかった嫌な思いをさせたかもしれない」

「大丈夫よ。私毎日眺めてるんだもん。この一番長いやつ、このときは成功したと信じたわ。目映い光に照らされ、花畑を歩いてた。そう、宙を飛んでいた。青く透き通った水がゆったり流れる川が真下にあつてね、やつと辿り着いたという声が聞こえた。気持のよい音楽が流れて、色とりどりの着物を着た人たちがたくさんいたの。私、そこでは女でも男でもなかった。何だ、そんなことなのか、と安心したところで、後ろから凄力で引張られたの。あつと

思う間もなく、雲を潜り、山の頂を滑り、街の上。気が付いたら、救急病院のベッド、という訳」

美和子は二杯目のジョッキを空けながら、「私こんなつまらないことで悩んでいたんだ、ということにいつも気付くよ。でも、性懲りもなくまたやってしまうの」と言い、整った横顔を少しだけ歪めた。

泰司は教えてもらっていた夏彦の携帯に連絡し、美和子と会う手筈を整えてもらった。替わりに、亜希と会ってみるのはどうだと話を向けたが、「理屈っぽい女、俺は得意じゃないんだ」と言うので、ともかく二人が会うことになった。

「お母さんのこと、憎んでるんだって」

「そりゃあ憎いわよ。私を全く男としてしか認めないし、男として働くことだけを強いて来たから。無理もないことだろうけど。でも、私はいつも自分は女だと主張して来たのよ。だけど、母の常識で固まった頭は、どうしたってほぐれない。古いしがらみの中で育ち、暮らしてきたからかいつも、世間にもつともない、恥ずかしいの二言だけね」

美和子からは、蓮つ葉な言葉とは裏腹に、どこかに水仙の香が匂い立ち、溪流のせせらぎが聞こえてきそうな、明るい哀しみに似た趣が感じられる。

美和子は空の上から青く透き通った川の流れを目にしたとき、自分の体の垢が削ぎ落とされ「何というか、自分や

周りの人たちも、あらかじめ決められた役割を担っているだけなのかもしれない」と気付いたのだと言う。

「僕も一度、空の高みにまで上ったことがあるんだ。そのとき、この世は幾層もの襞で出来ていて、一つのことです喜一憂するものでもないんじゃないかと感じた。君の身の上のことに障るかも知れないけれど」

泰司が十年前の経験に触れると、美和子も、「自死するほどのことでもないわ、って思えるようにはなかったのよ。でも、どうなり行くのかはわからない。自分が男であれ女であれ、結局それが決定的な自分ではないんだし、もうどうでもよくなって。今はむしろ、深く深く静かな森の中を流れる溪流の傍でひっそりと眠っていたい、という思いに惹かれるの」と、「阿弥陀堂の狭霧」という作品に感じた、大きな力の懐に抱かれるという感動は、今も忘れることが出来ないのだと言った。

紫陽花を出て、街の明かりの中を二人歩きながら、「夏彦も含め僕たちが、同じ場所出会ったということは、どんな意味があるんだろう」と話し、立ち止まっては欠け始めた月に掛かる雲の流れを見上げ、川縁まで来て、美和子は橋の方へ、泰司は反対側の交差点の方へと別れた。

十

亜希がやって来たのは、十二時を回っていた。足元が定

まらないほどに酔っていた。ろれつが回らない。玄関を入

ったと思ったらトイレに直行し、開け放したまま、ゲロを吐いた。亜希は、シャツの胸にも、ジーンズにもゲロを吐き掛けていた。

「どうしたんだ。何でこんなに飲んだ」

泰司は亜希のシャツを剥ぎ取り、ジーンズを脱がせ、下着も脱がせ、シャワー室に座らせ、頭の上から足指の先まで洗ってやった。バスタオルでくるみ、いつも亜希が置いている着替えを取り出し、着けるように促した。しかし、亜希の吐き気は収まりそうもなかった。

トイレに屈み込み、悲鳴をあげながら吐く。

「夏彦と飲んだ。今日の夏彦のオーラはせせらぎの相だった。ジョッキ三杯ずつ、飲んだ。夏彦はもういいんだと言っていた」

その間にも、悲鳴をあげながら吐いた。

「夏彦は、森の溪流の音に溶け、消え去るのが夢だと言う。夏彦と寝たんだ。多分今頃、彼は生きてはいないよ。長崎の離島には帰らないし、水仙の香が何とかなって」

亜希は新しいバスタオルまで汚し、泰司の腕に倒れ込んで来た。泰司は、亜希をベッドに運んでやり、抵抗する腕や足を振りほどき、携帯を手にすると夏彦に掛けた。

夏彦は出なかつた。一度目、三度目、六度目も出なかつた。留守番サービスは出るのだが、そんな場合ではない筈

だった。

「夏彦の方が先だ」と玄関を出掛ったところで、いったん亜希を振り返った。亜希はベッドから落ち、俯せになつたまま吐いていた。

携帯が繋がった。夏彦だった。

「大丈夫か」

「美和子がな、またやらかした。もう救急車は呼ばない。

俺か：俺は美和子と一緒に薬を飲んだ」

泰司は、携帯に向かって声を張り上げる。

「夏彦、答えろ、答えろ。俺だぞ。自分勝手な真似するんじゃない。何とか言え」

泰司は、携帯を放り投げ、階段を走り下りた。後ろから、亜希が何か叫んだ。

通りになると、タクシーを探した。ダンブや燃料運搬車ばかりが轟音をたてて走り過ぎた。泰司は手を振った。

タクシーがようやく泰司に気付き、合図を送って来た。行き過ぎた道をゆっくりターンしている。

が、そのとき泰司は、タクシーが自分の体をスリと突き抜けて行く様を予感した。

(了)